調査報告

クロアチア紛争後のコメモレーションによる ナショナル・アイデンティティの強化と継承

Reinforcement and Transmission of National Identity
through Commemoration after the Croatian War

木戸 泉

KIDO Izumi

(2019年10月15日受付 2020年1月14日受理)

バルカン半島西部に位置するクロアチアは、1990年代のクロアチア紛争を経て、多民族国家ユーゴスラヴィアから独立を果たした。紛争終結から20年以上が経過した現在、クロアチア国内では紛争の記憶を強固にし、さらに次世代へ継承しようとする動きが見られる。特に激戦地となった都市ヴコヴァルでは、クロアチア系住民の紛争の記憶を強化し継承する行事の開催やモニュメントの設立が積極的に行われている。本研究では、それらの表象内容や設置主体を分析し、地域レベルと国家レベル、またナショナル・マジョリティとナショナル・マイノリティの間で、紛争に対する受け止め方に差異が生じていることを明らかにした。そしてこれを踏まえて、EU加盟を果たしたクロアチアという国家のナショナル・アイデンティティをめぐるダブルスタンダードについて検討を加えることができた。

The Republic of Croatia, located in the northwestern part of the Balkan Peninsula, became independent from the multiethnic state of Yugoslavia in 1991. Although more than 20 years have passed since the end of the armed conflict, Croatian officials are promoting a movement to reinforce memories of the war and transmit them to younger generations. The movement is especially popular in the city of Vukovar, once a site of violent clashes, where the ethnic Croatian population organizes various commemorative events and erects new monuments. Analysis of the symbolism of monuments and of the subjects depicted shows differences in attitudes toward the conflict at the local and national levels as well as between the national majority and minority populations. These differences clearly illustrate political double standards when it comes to the issue of national identity in Croatia, which joined the EU in 2013.

キーワード: クロアチア, コメモレーション, ナショナル・アイデンティティ, 紛争, 記憶, モニュメント

Key words: Croatia, commemoration, national identity, conflict, memory, monument

I はじめに

1990年代初頭、社会主義体制の国家が次々と解体された。バルカン半島西部に位置したユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国（以下、ユーゴスラヴィア）もその一つである。ユーゴスラヴィアは多様な民族からなる多民族国家であり、スロヴェニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニアの六つの共和国と、いくつかの自治州と自治区によって構成されていた。1980年の国家主導者ティトーの死を契機に、社会主義のイデオロギーによる市民統治が困難を極めるようになると、各共和国の民族が自民族中心の国家建設を目指し、連邦内の

共和国の独立を引き留めようとする、主にセルビア系で構成されたユーゴスラヴィア政府と各共和国の間で紛争にまで発展した。特にクロアチアとボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、1991年から1995年まで続いた紛争により、多くの犠牲者や難民を出し、その後の経済にも大きな爪痕を残した。

ユーゴスラヴィアから独立したスロヴェニアとともに、クロアチアは2013年にEUに加盟を果たし、超国家組織の経済・政治体制に組み込まれた。対外的な政策の一方、国内では自民族中心の政策が目立ち、一部のナショナル・マイノリティの権利は確実に保護されているとはいえない状況も見られる。また、同じくユーゴスラヴィアから独立したセルビアやボスニア・

ヘルツェゴヴィナは現在EU加盟を目指しているが、多民族国家であった歴史が生んだ民族や領土をめぐる問題ゆえに、最終的な加盟交渉前で足踏みをしている。

このような一連の民族をめぐる紛争を経て、新たな独立国では紛争の記憶を維持して継承する動き、すなわちコメモレーション（顕彰行為）が目立っている。中でもクロアチアではさまざまなコメモレーションが確認できる。クロアチアの最東端、セルビアとの国境に位置する都市ヴコヴァル Vukovar は、クロアチア紛争時に激しい戦闘があった場所であり、クロアチアにとって祖国を守った場所として、現在多くのコメモレーションがなされている。

ところで、戦争の記憶はナショナリズム研究で頻繁に取り上げられるテーマであり、たとえばアンダーソン（2007）は『想像の共同体』の冒頭で、「これほど近代文化としてのナショナリズムを見事に表彰するものはない」として「無名戦士の墓と碑」を挙げている。ナショナリズムの想像力は死（そして不死）と大いに関係があり、大量の同国民の死が、ひとりひとりの人間に同じ国民であることを想像させる、つまり「国民的想像力」を大いに働かせる装置となっているという（アンダーソン2007）。これはル・ゴフ（1999: 145）の言葉を借りれば、無名戦士の墓では「記憶は匿名性の限界を超え、名もなき死者の遺骸を前にして、共通の記憶における国民の団結が表明される」のである。モッセ（2002）は、市民宗教としての戦死者の英霊祭祀という視点から、大戦の戦死者が英霊として祭り上げられる背景と過程を、その著、『英霊』で明らかにした。そこでは、戦士の墓地は国民的崇拜の地となるように計画的に作られ、特にドイツでは国民意識を醸成するために重要な役割を担い、戦後も墓地への巡礼や儀式によって死者の記憶を維持し続けたと論じている。

一方、アメリカ合衆国でも公的記憶の創造における戦争の役割は歴史学者らによって大いに議論されている。たとえばボドナー（1997）は、ベトナム戦没記念碑をめぐる戦争参加者と国民国家の擁護者の二つの対立を、「公的記憶」の創造される中での公的利害と個別民衆的な利害の錯綜として描いた。また、スターケン（2004）は集合的記憶とは異なる「文化的記憶」という言葉を編み出し、ベトナム戦争とエイズ・キルト

を文化的記憶から分析することで、だれがアメリカ国民となるのか論じた。さらに日本の研究者では、栗津（2000: 199, 2006）が、戦争記念碑は近代国家が戦争による大量死を表象し、解釈したものであるとし、その解釈の形成過程をイギリスの戦没記念碑と沖縄の戦没者記念施設を通して分析している。また和田（2005）は、アメリカ独立革命に関する記念碑に着目し、ベトナム戦争などと異なり、異論のない「正統」な存在であるアメリカ独立革命の史実が、記念碑の設立によって再生産・再構成されることで、アメリカの伝統が創造されたと述べている。

このように、戦没者記念墓地や慰霊碑の建立は、国民国家が膨大な過去の戦争記憶の中から一部を選択し解釈した現象であり、それは現在の立場から未来に向けた国家の在り方を表明する現象となっている。そしてこれらに接することによって、人々は国民国家のために命を捧げた兵士とのつながりを強く感じることができ、同じ「想像の共同体」に所属しているという意識を強めるのである。

しかし、以上のような戦争記憶とコメモレーションの研究では、マジョリティとマイノリティの両面からの検討が十分になされていない。つまり、多くの研究で論じられている国家による戦争記憶の戦略的利用は、基本的に国家のマジョリティに受け入れられていくものである。もちろん、マイノリティの人々が、戦争記憶の統合によって「一つの国民である」という意識をもつケースもあろう。しかし、国家による意識統合には相容れないマイノリティがいることも事実である。

スターケン（2004: 35）のように、文化的記憶に基づく国民の「想像の共同体」におけるマイノリティの差異化・排除の問題を指摘した研究があるものの、ナショナル・マジョリティと異なる属性（エスニックなど）をもったナショナル・マイノリティの肩身の狭さについて論じる研究はいまだ少ない。排除され取り残されたマイノリティが国民的記憶に感じる違和感も指摘することによって、戦争記憶と国民国家の関係についての議論をさらに深めることができるだろう。そのためにも、埋もれてしまいがちなマイノリティの声や彼らの小さな記憶に対する実践をフィールドに基づいて記述することが重要である（栗津 2006: 114）。ナ

ショナル・マジョリティとナショナル・マイノリティの紛争記憶に関するコメモレーションを検討することによって、その国のナショナル・アイデンティティの有様も見えてくるのである。

そこで本研究は、クロアチアにおける戦争記憶の表象、特にヴコヴァルで行われているコメモレーションに着目し、エスニックマジョリティであるクロアチア人とエスニックマイノリティであるセルビア人にどのように受け止められているか、そしてコメモレーションがいかにナショナル・アイデンティティの強化と継承をもたらしているかを明らかにすることを目的とする。

コメモレーションには記念碑や記念館、記念行事などが該当する。本研究では、特に記念碑の分析に際しては、フット（2002）の景観分析方法を援用する。フットは、アメリカ合衆国における暴力や悲劇の現場の景観を四つの類型（聖別、選別、復旧、抹消）に分類し、アメリカ人がその現場をどのように表象するかは、社会的・集合的記憶と関係しており、景観やそこにある記念碑はその耐久性・永続性をもつ特性ゆえに、長期的な集合的な価値観を象徴するものであるとした。また、いまだにコンセンサスが得られていないために何らかのコメモレーションがなされていない場所は、その存在自体が公的意味合いや社会的記憶をめぐる一種の集団的な曖昧さを表していると指摘した。この指摘は、聖別や選別のコメモレーションだけでなく、抹消という今まで議論されていなかった景観に焦点を当てたからこそ見えてくるものと考えられる。この点で、こうした景観の分類は、ヴコヴァルにおけるナショナル・マジョナリティとナショナル・マイノリティの紛争をめぐる考え方の違いを明らかにすることに有効であろう。

以下では、まずクロアチア国内の多民族性を歴史的、地理的に簡単に俯瞰したのち、民族構成に着目しながら1990年代のクロアチア紛争の経緯を概観する。つぎに、ヴコヴァルで現在行われている紛争関連のコメモレーションとしての記念碑、記念館、記念行事の分析を行い、可視化されたヴコヴァルのコメモレーションに対するナショナル・マジョリティ内での紛争に対する受け止め方が、ナショナル・マジョリティ内部においても、またナショナル・マジョリティとナ

ショナル・マイノリティ間においても差異がみられる点を指摘し、これと連動するクロアチアのナショナル・アイデンティティについて考察する。

なお、本稿における国民と民族の呼称について説明しておく。セルビア国籍をもちセルビアのアイデンティティをもつ者はセルビア人、クロアチア国籍をもちセルビアのアイデンティティをもつ者はセルビア系住民、国籍を問わずセルビアのアイデンティティをもつ者はエスニック・セルビア人を呼ぶこととする。同様に、クロアチア国籍をもち、クロアチアのアイデンティティをもつ者はクロアチア人とし、国籍を問わずクロアチアのアイデンティティをもつ者はエスニック・クロアチア人とする。なお、クロアチアの国籍をもつ者の総体はクロアチア国民とする。

II クロアチアの多民族性と紛争の経緯

1. クロアチア概要

クロアチアはバルカン半島西部に位置し、面積56,542 km²（九州の約1.5倍）、人口約428万人を擁する。1991年にユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国より独立し、2013年にEU加盟を果たした¹⁾。国内は四つの地域からなり、首都ザグレブが位置する中央クロアチア、その東、ハンガリー平原に広がるスラヴォニア、西端に位置するイストリア、アドリア海に沿って南に伸びるダルマティアがある（図1）。ザグレブに製造業やサービス業が集中する一方、イストリアとダルマティアの沿岸部には歴史都市が立地することか

図1 四つの地方からなるクロアチア

Fig. 1 Republic of Croatia and its four main regions

ら、夏のバカンスを過ごす多くの観光客が訪れ、観光業が重要な産業になっている。このほか、沿岸部の造船業や石油化学工業も重要な産業部門になっている。これに対して、スラヴォニアは農業地域であり、小麦やトウモロコシの栽培が盛んだが、人口の流出が目立ち、経済的には停滞傾向にある。

2. クロアチアの多民族性と紛争

1) 多民族地域の形成

現在、クロアチアを構成する主要民族はクロアチア人である。国内の総人口に占めるクロアチア人の割合は、独立後ゆるやかに上昇し、2011年の国勢調査ではついに総人口の90%以上を占めるまでになった。一方、最大のナショナル・マイノリティはセルビア系住民である。クロアチア人が増加するのとは逆に、年々その数は減少しており、2011年の国勢調査では総人口の4.4%となっている（表1）。これに次いで、ボシュニャク系住民（ムスリム）、ハンガリー系住民、イタリア系住民など22のナショナル・マイノリティがいる²⁾。

そもそもクロアチア人は、7世紀頃にバルカン半島に定住したスラヴ人のうち、内陸部のパンノニア地方や沿岸部のダルマティアに住み着いた人々に由来する。925年に統一国家がつくられ、ローマカトリックを受け入れながら以後200年にわたって王国を維持し続けた。11世紀に最盛期を迎え、当時の繁栄ぶりは叙事詩などによってのちの時代に伝えられている。その後、彼らの国家は消滅し、以後、20世紀に至るま

でハプスブルク帝国およびその後継国の支配下に置かれ、オスマン帝国との国境地域となった。しかし、中世に繁栄した王国の記憶は近代のナショナリズムの時代に頻繁に持ち出され、独自の国家をもつことがクロアチア人の悲願となった³⁾。

一方、クロアチアの東隣に居住するセルビア人は、同じスラヴ人ながらセルビア正教会の信仰を選択した人々に由来する。彼らは中世に独自の国家を建設したが、コソヴォの戦い（1389年）の敗北を喫し、オスマン帝国の支配下に入った。以来、その支配は20世紀初頭まで続いた。こうしてクロアチアとセルビアは、ハプスブルク帝国とオスマン帝国それぞれの最前線として長く対峙し続けてきた。それがのちのクロアチア紛争で最大の争点となる「セルビア人問題」へと発展してゆく。

19世紀後半になると、これらの人々の間には民族自決の機運が高まり、南スラヴ人（ユーゴスラヴ）による国家建設が模索されるようになった。第一次世界大戦によってこの二つの帝国が崩壊すると、セルビア人国王を国家元首に掲げた「セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国」、いわゆる「第一のユーゴスラヴィア」が誕生する。ただし、セルビア人国王の独裁体制に他の民族の反発が起こり、国内の混乱は絶えなかった。それは第二次世界大戦時の壮絶な「兄弟殺し」⁴⁾へと発展していく。大戦後、バルチザンで活躍したティトーを中心とした社会主義体制の「第二のユーゴスラヴィア」によって、この対立は当面抑え込まれ、「第二のユーゴスラヴィア」では自管理体制

表1 ヴコヴァルおよびクロアチアにおける民族構成
Table 1 Populations of Vukovar and the Republic of Croatia by ethnic group

地域(面積)	民族	1991		2001		2011	
		人口(千人)	割合(%)	人口(千人)	割合(%)	人口(千人)	割合(%)
ブコヴァル市 (100.26km ²)	クロアチア人	36.9	43.8	18.2	57.5	15.9	57.4
	セルビア系住民	31.4	37.3	10.4	32.9	9.7	34.9
	その他	15.8	18.8	3.1	9.7	2.1	7.8
	総計	84.2	100.0	31.7	100.0	27.7	100.0
ブコヴァル・スリエム郡 ヴコヴァル市を除いた4都 市、 26地方自治体	クロアチア人			142.1	82.1	126.3	83.2
	セルビア系住民			21.2	12.3	18.2	12.0
	その他			9.8	5.7	7.4	4.9
	総計			173.1	100.0	151.8	100.0
ブコヴァル・スリエム郡全 域 (2,454km ²)	クロアチア人			160.3	78.3	142.1	79.2
	セルビア系住民			31.6	15.5	27.8	15.5
	その他			12.8	6.3	9.6	5.3
	総計			204.8	100.0	179.5	100.0
クロアチア全域 (56,542km ²)	クロアチア人	3,736.4	78.0	3,977.2	89.6	3,874.3	90.4
	セルビア系住民	581.7	12.2	201.6	4.5	186.6	4.4
	その他	466.2	9.6	258.7	5.8	223.9	5.2
	総計	4,784.3	100.0	4,437.5	100.0	4,284.9	100.0

(クロアチア統計局国勢調査1991年、2001年、2011年より筆者作成)

制や緩やかな連邦制を敷くことで、民族の枠組を超えた国家が構築された。しかし、ティトー亡き後は、国内における経済の南北格差が解消されていないことを背景に、セルビア人の有意な立ち位置に不満もあって、各構成共和国でユーゴスラヴィアの政治体制に反発する民族主義的な指導者が現れるようになった。特にクロアチアは、経済水準が高く南部の経済状況に不満をもつスロヴェニアと足並みを揃えて、ユーゴスラヴィアからの独立を目指していく。

2) クロアチア独立と紛争

クロアチアでは、1991年に始まったクロアチア独立紛争（以下、クロアチア紛争）を「祖国戦争 Domovinski rat」と呼んでいる。現在、クロアチアでは「祖国戦争」専用の歴史教科書がつくられており（Barič et al. 2015）、多くの時間を割いて授業が行われている。クロアチア紛争は、クロアチア人の民族主義者トゥジマン⁵⁾によるクロアチアの国土回復・国土維持のための重要なプロセスであり、クロアチア人側から見た戦争記憶自体が彼らにとって重要なアイデンティティの要素の一つとなりえた。そして記憶が風化されることのないよう、維持と継承のための努力がなされている。

クロアチア紛争の経緯は、ユーゴスラヴィアの一部を構成していた1990年5月、トゥジマンが右派政党のクロアチア民主同盟（HDZ）を率い、クロアチア共産主義者同盟との選挙で勝利したことにさかのぼる。彼は筋金入りの民族主義者であり、民族自決に基づいた「分離独立をも含めた、歴史的・自然境界における全クロアチア人の純粋・不可分な自決権」を主張していた（月村 2001: 17）。

彼は1990年にクロアチア社会共和国幹部会議長（のちの大統領）に選出され、クロアチアの今後の重要課題10項目として、新憲法制定や、EC加盟を意味するクロアチアのヨーロッパの仲間入りと国内のヨーロッパ化などで挙げ（月村 2006: 35）、同年12月22日にはクロアチア共和国憲法（クリスマス憲法）を制定した。前文には、7世紀のクロアチア王国にさかのぼる歴史が書かれ、本文には国民を構成する民族としてクロアチア人のみが明記された。また、公用語はクロアチア語、ラテン文字のみの使用が規定され、セルビア系住民が用いるセルビア語とキリル文字は無視された（久保 2003: 160）⁶⁾。

1991年5月に行われた独立を問う国民投票の結果（賛成票94%）を受けて、同年6月にクロアチアはスロヴェニアと共に独立を宣言し、翌1992年1月にECが両国の独立を承認した。しかし、国内ではセルビア系住民が自治を求めて団結を始め、クロアチア人との衝突が頻発した。またユーゴスラヴィアはクロアチアの離脱を承認せず、クロアチアに住むセルビア系住民の保護に向けて、着々と軍備を整えていた。

クロアチアのセルビア系住民は、スラヴォニア東部と中央クロアチア東部にまとまった数で分布している。特に中央クロアチアのセルビア系住民は、クリスマス憲法制定直前の1990年12月21日、「クライナ・セルビア人自治区」の創立を宣言し、代表のバビッチは「クロアチア人が排他的に自分の国家をつくろうとしている」としてクロアチア当局を非難した（久保 2003: 167）。ここでは、住民の半数以上がセルビア系住民で占められていた。一方、クロアチア東部のセルビア系住民もこの動きに同調して「スラヴォニア・バラニャ・西スレム・セルビア人自治区」を設立した。しかし、ここではセルビア系住民は地域人口の3割強の規模にすぎなかった。これがユーゴスラヴィアを構成するセルビア勢力にとって、「純然たるセルビア系住民地域をつくる」ための侵略と、「民族浄化」を正当化する根拠となった（久保 2003: 165）⁷⁾。1991年5月に行われたクロアチア中部と東部のセルビア系住民が多く住む地域での投票を経て、クロアチアの国土約3分の1を占める「クライナ・セルビア人共和国」がセルビア系住民によって一方的に創設された。この共和国は国際社会で認められることはなかったが、その後のクロアチアにおける「セルビア人共和国」の問題であり続けた。1995年5月、クロアチア軍による西スラヴォニア地域で「閃光作戦」と、同年8月のクライナ地域での「嵐作戦」が行われると、「共和国」内のセルビア系住民は国外に追放され、「共和国」は解体された。これによりクロアチアは国土をほぼ回復し、同時にセルビア系難民・避難民が大量に出る結果となった。

1995年12月の Dayton 合意により、クロアチア紛争は終結した。なお、セルビア系住民が支配した東部地域は紛争終結後も維持されて国連軍（UNTAES）の管轄となっていたが、1998年1月クロアチアに平和裏

に返還され、これによってクロアチアは独立当初の国土を回復した。

クロアチア当局によると、兵士や市民など少なくとも19,500人が紛争により死亡もしくは行方不明であり、35,078人が負傷したとされている（負傷者数には国連平和維持軍78人、ユーゴスラヴィアの兵士613人も含む）。クロアチア各地が戦場となったが、中でもクロアチア紛争最大の激戦で知られるヴコヴァルの戦いでは、最も多くのクロアチア人犠牲者が出た。また、ヴコヴァルの戦いは、セルビア勢力が主体のユーゴスラヴィア人民軍（以下、JNA）がクロアチアで初めて主体的に関わった戦いであり、クロアチア紛争の象徴となったという点でも重要である（月村 2006: 68）。

3. ヴコヴァルの戦い

本稿の調査地であるヴコヴァル市（以下、ヴコヴァル）はクロアチア独立紛争の激戦地の一つであり、ヴコヴァルにおける一連の戦闘はヴコヴァルの戦いと呼ばれている。現在ヴコヴァルは、クロアチア系住民にとって「犠牲と抵抗の象徴」の町になっている。

1) 民族対立の場としてのヴコヴァル

ヴコヴァルは、クロアチア東部のスラヴォニアにあるヴコヴァル・スリエム郡の郡都である（面積100.26 km²、2011年の人口27,683）。ヴコヴァルの戦いによって、約22,000人が住む場所を追われたため、人口は84,189人（1991年）から31,670人（2001年）へと大幅に減少し、その後も減少の一途をたどっている。ヴコヴァルは、ドナウ川に面していることからクロアチア最大の河港を擁するが、紛争後はかつてあった活気を失っている。現在の主要産業は、広大なハンガリー平原南部に位置することから、小麦やワイン用ブドウ栽培、畜産業である。2011年時点でのヴコヴァルの失業率は35%と、全国平均に比べて高い。

民族別に見るとクロアチア系住民が15,881人（人口比率約57%）、ついでナショナル・マイノリティのセルビア系住民が9,654人（約35%）となっており、このほかにハンガリー系住民などのマイノリティがいる（2011年）。一帯はクロアチアの他の地域に比べて、セルビア系住民が比較的多く居住している地域であり、ヴコヴァル・スリエム郡の基礎自治体⁸⁾には人口の約9割をセルビア系住民が占める地区もある。

この地域に比較的多くのセルビア系住民が居住しているのは、かつて大規模な入植活動が行われたからである。その第一波は、16世紀後半からハプスブルク帝国支配下の軍政国境地帯で起こった。対オスマン帝国の防衛ラインとして設定されたこの軍政国境地帯には、いわゆる屯田兵が入植し、帝国内各地からの入植が進められた（石田 2003）。第二波は、第二次世界大戦後にドイツ人が国外に追放されたあとに入植したセルビア人農民である。彼らは第二次世界大戦中にパルチザンとして活躍したため、戦後その処遇が配慮されたのである。

この地域でのクロアチア人とセルビア系住民をめぐる摩擦が大きくなったことについては、第二波のセルビア系住民の入植以来のクロアチア系住民との共存の歴史が浅く、それゆえに紛争がより激しいものになったとの見解もある（定形 2001⁹⁾）。

1980年代後半にクロアチア民族中心主義の政策が次々と打ち出されるようになると、ヴコヴァルの人口の約3割を占めるセルビア系住民が自治を要求し、これに対してクロアチア人が彼らの存在を疎ましく考えるようになったというわけである。

2) ヴコヴァルにおける戦闘

ヴコヴァルは戦略上の要衝として、クロアチア軍とJNA双方にとってきわめて重要な場所とされた。1980年代にクロアチアの独立の動きが出始めた頃から、ヴコヴァルでもクロアチア人とセルビア系住民の間の緊張は徐々に高まり、かつてあった平穏な共生は困難になった。1991年8月25日にドナウ川を越えてヴコヴァルに進攻したJNAは、周囲の道路を封鎖してヴコヴァルを完全に包囲し、その後3カ月にわたるクロアチア軍による抵抗もむなしく11月18日にヴコヴァルは陥落した。市街地は徹底的に破壊され、歴史あるバロック建築も甚大な被害を受けた¹⁰⁾。

その後、この地域はJNAが支配し、クロアチア国内の他地域や同じ時期に紛争中のボスニア・ヘルツェゴヴィナから逃れてきたエスニック・セルビア人が流入した。

クロアチア紛争では、各地で衝突や虐殺が発生した。中でもヴコヴァル陥落直後に起こったオヴチャラの虐殺は、クロアチア紛争において最大規模のものであった。ヴコヴァル市立病院の医療従事者と病院に収容さ

れていた負傷者ら数百人がJNAによって郊外のオヴチャラ農場に連れ出され、そこで殺害されたのである。2008年のヴコヴァル市立病院の発表によると、この虐殺による犠牲者数は身元が判明した者で211人にのぼり、55人が行方不明のままである（Croatian Homeland War Memorial and Documentation Centre 2011: 135）。オヴチャラの虐殺がクロアチア人にとって今なお忘れない戦争記憶となっていることは、ザグレブにあるクロアチア祖国戦争メモリアル・ドキュメンテーションセンター（以下、ドキュメンテーションセンター）が編纂・発行した紛争の資料に、「クロアチア共和国の自由と独立のための苦難の象徴」と記されていることからうかがえる（Nazor 2011: 223）。

2007年のクロアチア当局の統計によると、ヴコヴァルの戦いで少なくとも1,739人が死亡した（うち、子ども89人）。彼らの遺体は、ヴコヴァル・スリエム郡各地にある52の「集団墓地」やそれ以外の場所に埋められ、紛争後の発掘調査で1,717人の身元が判明している（2007年現在）。ヴコヴァル第204旅団では、879人が死亡もしくは行方不明、777人が負傷した。一方、ヴコヴァルの戦いによるユーゴスラヴィア側の死者は、クロアチアの発表では5,000人から15,000人とされているが、セルビアの発表は1,200人ほどとなっており、犠牲者数の見解は大きく分かれている（Croatian Homeland War Memorial and Documentation Centre 2011: 72）。

また、この戦いではヴコヴァルのセルビア系住民も犠牲者を出ていることに注意したい。クロアチア人犠牲者とは異なり、セルビア系住民の犠牲者数は現在も正確には把握できておらず、また行方不明のままとなっている者も多い。セルビア系住民への聞き取り調査によれば、戦前に50人、戦時中に150人ものセルビア系住民がクロアチア系住民により殺害されたという¹¹⁾。

ところで、ヴコヴァルの戦いで多大な犠牲者が出たことについて、新生国家クロアチアの思惑をあげておく必要がある。クロアチア軍は、JNAがクロアチア国内にある二つのセルビア人地区、すなわち東部のスラヴォニア地域と西部のクライナ地域を連結されようとするのに対して、これを阻止するためにJNAの戦略拠点であるヴコヴァルへの攻撃を強めた。しかし、その一方で、クロアチア政府は他地域での兵力増員や武

器調達、また国家の国際的承認を受けるための外交努力に力を注いでいた（Nazor 2011: 223, 224）。そのため、ヴコヴァルの戦いは長期化し、多大な犠牲を払うことになった。いわば、ヴコヴァルは「捨て駒」的な役割を果たしたのである。ただ、ヴコヴァルの惨状がマスメディアを通じて世界に発信されると、JNAの残虐な行為への非難とクロアチアへの同情を呼ぶことになった。

ヴコヴァルの多大な犠牲のもとでJNAによるクロアチア侵略は阻止された。その結果、ヴコヴァルはクロアチア全土の防衛の象徴的な場所となった。ドキュメンテーションセンターには、「（ヴコヴァルにおける）クロアチア防衛者は、彼らの愛国心と勇気によって、クロアチアの歴史における栄誉ある地位を獲得した」と記されている（Nazor 2011: 224）。

4. 紛争後のクロアチアにおける民族構成

紛争終結後、クロアチアの人口は、多くの犠牲者や難民が発生したことによって大幅に減少した。それと同時に、民族構成も大きく変化した。紛争終結後、初めて行われた2001年の国勢調査では、クロアチア人が人口の9割近くに達した一方で、以前はクロアチアの主要民族を構成していたセルビア系住民は12%から4.5%へと著しく減少した。これは、クロアチア軍によるセルビア系住民居住地域の掃討作戦がなされたことが大きな理由だが、高揚するクロアチア・ナショナリズムに身の危険を感じて国外へ逃亡したセルビア系人難民がかなりの数にのぼったことも理由とされる。

III ヴコヴァルにおける紛争のコメモレーション

この章では、ヴコヴァルで見られる紛争に関するコメモレーションの内容と意味を、クロアチア国内におけるクロアチア人とセルビア系住民という二つの民族の立場から検証していく。ここで対象とするコメモレーションは、記念碑、記念館、記念行事である。なお、記念碑と記念館は、主に「ヴコヴァルにおける祖国戦争メモリアルセンター」（以下、メモリアルセンター）が管理・管轄内であり、ヴコヴァルの戦いに関するものと認識されていることから分析の対象とする。

1. 対象とする記念碑の検討

ヴコヴァルでは、市内を中心に多くの記念碑が設置されている(図2)。いうまでもなく、この一帯が紛争・虐殺の現場だからである。記念碑に永続性が伴うことはアルブヴァクスやフットが指摘する通りであり¹²⁾、ヴコヴァルにおける記念碑もその永続性ゆえに紛争時の記憶を現在にとどめる装置となっている。紛争後、記念碑がさまざまな場所に設置されることによって、ヴコヴァルは「祖国戦争を象徴する場所」として空間的な広がりをもち、町全体が「記憶の場」になっているように思われる¹³⁾。

そこで、主な記念碑を整理し、各記念碑の立地条件や設置の意図を検討し、記念碑個別の特徴からさらには紛争を象徴する空間的な広がり、クロアチア人の記憶を形成する「記憶の場」となっていることを示す。具体的にはメモリアルセンターの管轄下である記念碑と戦跡のうち、比較的規模の大きなもの七つを挙げる。

1) ルジャツの十字架

ルジャツの十字架は、 ヴコヴァル市街地から「ヴコヴァル第204旅団通り」沿いに郊外へ向かった場所にある。設置年は不明である。1991年11月2日にJNA

に占拠されたルジャツでは、兵士と市民あわせて59人が殺害された。ルジャツの占領は、のちのJNAによるヴェコヴァル陥落における足掛かりとなっている。

十字架の土台には、犠牲となった人々の氏名と共に、「1991年11月2日のセルビアの侵略における、ルジャツの69名の市民の悲劇的な死の記憶に」という碑文が書かれている。

2) ボグダノヴィツィの記念碑

ボグダノヴツィは、ヴコヴァル近郊にある人口1,960の小さな基礎自治体である。そのうちクロアチア人は1,231人で全体の69%を占めている。1991年に59人のクロアチア人の兵士と市民がここで殺害された。記念碑は、2006年に地区の中心地にあるカトリック教会の前に建てられた。この記念碑には、他の記念碑と異なり、1990年代のクロアチア紛争での犠牲者だけでなく、第二次世界大戦での地区の犠牲者の氏名も並べて書かれている。記念碑の中央には堂々としたキリスト像と碑文があり、向かって左には第二次世界大戦で亡くなった57人の名前が、向かって右にはクロアチア紛争で亡くなった128人の名前が書かれている（図3）。クロアチアの伝統的な組み紐文様であるブレテルの装

図2 ヴコヴァル中心地における記念碑の分布（数字は本稿に登場する施設）

Fig. 2 Distribution map of monuments in the city center of Vukovar

飾がなされている中央の碑文には、まず第二次世界大戦時のパルチザンやチェトニクで起きた蛮行が書かれ、つぎに「セルビアのクロアチア侵略で悪事が再び繰り返された」として、1990年代の紛争時のJNAと国内外のチェトニク¹⁴⁾の蛮行が記されている。つまり、この記念碑は、それぞれ時代の異なる二つの戦争の犠牲者を、セルビアの侵略と蛮行により犠牲となったという点で結びつけ、戦争の共通性と一貫性を示している。

3) ソティンの記念碑

ヴコヴァルのソティン地区がJNAに占領されると、1991年10月14日から20日にかけて、この地区のセルビア系以外の住人はJNAによって近隣のネゴスラヴツィの強制収容所へ連行され、拷問や尋問を受けた。また、残る人々も強制労働をさせられた。連行された人々の多くは、殺害されるか行方不明のままになっている。

ソティンの記念碑は地区のメインストリートである「フラニョ・トゥジマン通り」に面した場所に設置されている。磔刑のキリスト像が掲げられている十字架（碑文とクロアチア紋章が彫られている）の前に、犠牲者59人の名前と生没年の書かれた透明のプレートが60枚並べられている。磔刑像は2001年につくられ、プレートはメモリアルセンター職員の聞き取りによるとソティンの住民によって2015年10月14日に設置された。プレートの1枚目の碑文では、犠牲者たちは「私たちの祖国クロアチアの基礎に自分の人生を捧げた」と書かれている。また、プレートには「あなたが持っている誠実の旗が重いならば、私たちの骨が

埋められている地面にそれを挿しなさい。私たちが支えます」という死者側の言葉も添えられている。

4) 祖国戦争犠牲者のための記念墓地

記念墓地は、ヴコヴァル市街地から「パン・ヨシップ・イェラチッチ通り」を南東方向へ5 kmほど進んだ郊外にある。ここはヴコヴァル最大の市民墓地であり、ヴコヴァルの戦いで犠牲となった人々が埋葬されている。毎年11月18日の犠牲者追悼記念式典（以下、記念式典）では、市内の市立病院からこの記念墓地まで歩き、中央記念碑の前で式典が行われる。

正門から進むと放射線状に墓が並んでおり、その中心を貫く道の先に大きな中央記念碑が立っている（図4）。中央記念碑はザグレブの彫刻家が設計し、2000年8月5日に退役軍人省によって設置された高さ4 mの巨大なブロンズ製の碑である。この記念碑には十字の切れ込みが入っており、十字架とヴコヴァルの犠牲者を表している（Marič 2005: 39）。中央記念碑の背後には938本の白い十字架が並んでおり、この本数はヴコヴァル市内や周辺にあった13カ所の「集団墓地」から掘り起こされた遺体の数を示している。この十字架は、そこに死者が埋葬されているわけでも、死者の名前が明記されているわけでもない。記念式典の日には、十字架ひとつひとつに小さなクロアチア国旗とロウソクが供えられる。この白い十字架は犠牲となった人々の数を視覚的に示す記念碑としての機能を果たしている。

図3 ボグダノヴツィの記念碑
(2016年9月4日撮影)

Fig. 3 Monument to Bogdanovci

図4 記念墓地にある中央記念碑と白い十字架
(2016年8月31日撮影)

Fig. 4 Central monument and white crosses in the Memorial Cemetery

5) 給水塔跡

戦争遺跡の一つである(図5)。1968年のユーゴスラヴィア時代に建てられ、その高さで容積から、当時はこの種の施設の中ではヨーロッパ最大であった。上層階には展望台兼レストランが併設されており、かつては市民の憩いの場所となっていた。しかし、紛争時にはJNAに真っ先に狙われた標的の一つとなり、著しい損傷を受けた。現在は、紛争時の攻撃で受けた600以上もの弾痕がある状態で保存されている。

内部は現在立ち入り禁止となっており、外壁には紛争を伝える小さなプレートが掲げられているだけで、紛争についての記述や表象は比較的控えめである。しかしながら、給水塔は高さが50mの巨大な建築物であり、砲撃跡を曝す痛ましい様子は、そこにありながらすでに紛争の記憶を力強く語っており、説明や演出を加える必要がないのだろう。唯一の演出といえば、屋上にはためくクロアチア国旗(図5には写っていない)である。

図5 給水塔
(2016年8月31日撮影)

Fig. 5 Vukovar water tower

6) 中央十字架

中央十字架は1998年10月にアドリア海の港町プーラのクロアチア海軍によって贈呈された。戦争記憶を象徴するものとしては、もっとも特徴的な記念碑である。

この十字架は、ヴコヴァル市街地のドナウ川とヴカ川の合流地点に建っている。高さ9.5m、重量40tの重厚なつくりで、図6からわかるように遠方からもその存在感が伝わってくる。十字架の横にはヴコヴァル・スリエム郡の郡旗、クロアチア国旗、EU旗がはためいている。傍らにはベンチがいくつか置かれ、夜にはライトアップされる。普段から市民の散歩コースに入るなど、人々が気軽に訪れる場所の一つとなっている。

この記念碑は、台座部分と十字架部分がそれぞれ異なった石材でつくられている。台座部分はクロアチア西部にあるイストリア半島の都市パジンの石、十字架部分はブラチ島の石が使われている。ブラチ島はヴコヴァルからはるか離れたダルマティア地方にあり、良質な石材が採れることで知られている。また十字架部分には、クロアチアの伝統的な組み紐文様プレテルが施され、その下にはクロアチアの紋章と中世クロアチアでのグレゴリー文字を用いた「誠実に死んだ者は、永遠に生きる」という詩が記されている。

つまり、この十字架にはクロアチアの国土や歴史が表象化されており、ここにはヴコヴァルの犠牲を記念するだけでなく、クロアチア国民の総意が反映されていると見ることができる。

図6 中央十字架
(2016年9月4日撮影)

Fig. 6 Central cross in Vukovar

2. 記念碑の分析

紛争の記憶を記念碑や行事などで表象し、顕彰しようとする背景には、必ず明確な目的や意思がある。クロアチアのコメモレーションは、フットの四類型に当てはめると、いずれもその場所が重要で記念行為の対象とされる点で「聖別」ないしは「選別」に該当しており、どれも似たような性格を有すると思われる。しかし、それぞれのコメモレーションには、たとえば記念碑における碑文や、儀式における衣装のように、その意図が可視的に示されている場合が多く、それゆえに、これを手掛かりにしてコメモレーションの表象内容を明らかにすることができると考えられる。

そこで、フットの景観分析の意義を踏まえつつ、先の七つの記念碑が表象する内容について、ローカルとナショナルという二つのレベルに分けて検討する。

1) ローカルレベルでの記憶の象徴

ルジャツの十字架、ボグダノヴツィの記念碑、ソティンの記念碑は、犠牲者を追悼する目的だけでなく、紛争時にその地域内で起きた事件を、その場所の記憶として住民が共有するための記念碑として機能している。すなわち、これらは現地の住民が主体となって設置した記念碑であり、過去の記憶をその場所と結びつけて継承することが求められている。そのため、必ずしもそれが起こった場所ではなく、むしろ地域住民の目に留まりやすい場所に設置されている。

ルジャツの十字架では、犠牲者が出た現場ではなく、犠牲者をまとめて一つの十字架に表象されている。このように犠牲者を1カ所に集中させることで、紛争の記憶をローカルレベルで共有・継承させている。また、ボグダノヴツィの記念碑では、ボグダノヴツィという小さな基礎自治体が、時代を隔てながらも繰り返しセルビアによる侵略の犠牲となったという記憶を一つの記念碑にまとめることで共有している。ソティンの記念碑は、設置主体が住民であること、そして立地が地区の中心地であること、記念碑の内容がソティン地区の住民の記憶を共有させており、ローカルレベルの記憶を表象したものになっている。

2) ナショナルでの記憶の象徴

祖国戦争犠牲者のための記念墓地、給水塔跡、中央十字架は、都市や小規模な共同体レベルの枠を越えたクロアチア人共通の記憶が表象されている。ローカル

レベルの記念碑との違いは、具体的な事件を示すものではなく、紛争全体の犠牲者の記憶を表象するものであること、表象内容が概して抽象的である点になる。また、いずれの記念碑も巨大で、ランドマークとして目立つ記念碑である。以下、具体的に見てみよう。

祖国戦争犠牲者のための記念墓地は、巨大な記念碑や白い十字架の存在などによって、また毎年大規模な式典の舞台となる、ヴコヴァルの犠牲を表象する巨大な空間になっている。そのため、これらの記念碑はヴコヴァルという都市レベルを超えた、クロアチア人に共通した戦争記憶を象徴するものとなっている。つぎに給水塔跡は、メモリアルセンターが「(給水塔跡は)この町の受難と抵抗、そして勝利、新たな生命の象徴である」と紹介するように、ヴコヴァルの戦い、そしてヴコヴァルという町自体のシンボルとして、その写真や絵が国内各地で使用されている¹⁵⁾。給水塔やオヴチャラの虐殺現場周辺の土産店には、給水塔を模したマグネットや石鹸などが販売されている。給水塔は戦争遺跡であるが、このように象徴化されることによって国内での知名度を高めており、クロアチア人の間で共有される記憶の表象として十分に機能している。さらに中央十字架は、先に述べたように中世のクロアチア王国からの伝統の意匠、ダルマチア地方の特産品の石材、クロアチアの紋章と、きわめて明確に「クロアチア的」なものを表象した記念碑となっている。つまり、この記念碑は「クロアチアの自由のために命を落とした全ての人の名誉を記念」するものであり、記憶はヴコヴァルに限定されていない。この点で、クロアチア人で構成されたクロアチアという国家の記憶を象徴しているといえよう。

ところで、これらが表象するナショナルな記憶が、セルビア系住民を含めたクロアチア国民ではなく、クロアチア人の記憶に限定されている点に注意したい。すなわち国民全体にとっての犠牲ではなく、クロアチア人にとっての犠牲が表象されている。いずれの記念碑もセルビアによってもたらされた犠牲を表象しており、セルビア系住民にとって共有しにくい記憶なのである。

3. 紛争を展示する記念館

ヴコヴァルにはメモリアルセンターを含め、三つの

紛争関連の記念館がある。以下、それぞれの特徴をまとめながら、ヴコヴァルにおける記念館の役割について検討する。

1) メモリアルセンター

メモリアルセンターは、2013年5月3日にヴコヴァル第204旅団の広大なバラック跡地に設置され、クロアチア紛争に関する記念施設の運営、研究、教育活動を行っている。紛争、特にヴコヴァルの戦いを紹介する中心的な施設であり、毎年多くの来訪者を受け入れている。

展示の内容は、当時のヴコヴァルの人々の抵抗に関する記述や、当時使われた手作りの武器、JNAが所持していた地図など多岐にわたる。また、屋外には戦場が再現されており、当時使用されていたロケットランチャーや戦車などの大型の兵器の展示のほかに、小さな川や塹壕も復元されている。墜落したJNA軍の戦闘機の一部も置かれている(図7)。このほか、地下にはJNAによる二つの強制収容所が再現されており、地面に小さな敷物を敷いた薄暗い空間に、むち打ちの姿勢を強いられた人間が針金で表現されている(図8)。

施設職員によれば、このような展示は、国内各地から見学に訪れた学校生徒らにも戦争の経験を体感してもらうことを目指しているという。メモリアルセンターが平和教育を行う教育機関であることは、「8年生ヴコヴァル訪問プログラム」に見て取ることができる。このプログラムは、祖国戦争教育を含めた現代史を学習する小学校8年生¹⁶⁾がヴコヴァルを訪れるも

図7 メモリアルセンター敷地内に再現された戦場、奥にJNAの軍機の一部が見える
(2016年8月31日撮影)

Fig. 7 Battlefield reproduction and JNA fighter aircraft in the Vukovar Memorial Centre

ので、メモリアルセンターをはじめとする施設や記念的な場所を2日かけてクロアチア紛争とヴコヴァルの戦いについて学び、そして平和の重要性を考える国家的な学習プログラムである。プログラムの費用は、クロアチア退役軍人省から供出されている。2014/2015年度にはパイロット版としてスラヴォニアの五つの郡に住む約7,000人の8年生がプログラムに参加し、ヴコヴァルの記念的な場所を訪れた。2015/2016年度から本格的にプロジェクトが行われており、これまでにクロアチア全土の8年生42,791人が訪問している¹⁷⁾。

このプログラムでの「平和教育」の最終目標は、「生徒に共存、理解、そして寛容を教えること」であり、著名な政治家、スポーツ選手らによる自らの戦争経験のレクチャーやワークショップ、クイズなどによって生徒に主体的に平和な未来の構築を考えさせるプログラムとなっている。

以上のように、資料だけを見るだけでなく、見学者が紛争当時を体験できる展示の工夫がなされており、クロアチア紛争を体感してその記憶が共有できる空間になっている。

図8 メモリアルセンターに再現された強制収容所の様子
(2015年11月17日撮影)

Fig. 8 Concentration camp reproduction in the Vukovar Memorial centre

2) クロアチア防衛軍記念館

この記念館は、2011年9月24日にヴコヴァル市長、当時の首相、退役軍人協会の代表者らによって、かつて郵便局があった「トゥルピニスカ通り」に建てられた（図9）。

記念館の正面には、「勇敢な防衛軍によって破壊された」JNA軍の戦車と「偉大なヴコヴァルの英雄」であるブラゴ・ザドゥロクという兵士の胸像が置かれている。施設内は一つの大きな空間になっており、壁には当時の紛争の状況を映した映像が流れている。また、中央には円筒形に区切られた空間があり、その壁にはヴコヴァル第204旅団の犠牲者の名前が赤く映し出されている。円筒形の空間の足元にはJNA軍の戦車が埋められており、当時使用された砲丸がこれを取り囲

図9 クロアチア防衛軍記念館
(2016年9月4日撮影)

Fig. 9 Croatian defenders' Memorial Home, located on Trpinjska Street, Vukovar

図10 クロアチア防衛軍記念館に埋められたJNAの戦車

(2016年9月4日撮影)

Fig. 10 JNA tank in the Croatian Defenders' Memorial Home

むデザインになっている（図10）。ここでは、ヴコヴァルは防衛軍の犠牲の上に成り立っているという強いメッセージを受け取ることができる。この記念館はクロアチア防衛軍の犠牲を表象し、さらに戦争記憶の一つとして彼らの犠牲を象徴的なものになっている。

3) オヴチャラの虐殺記念館

IIで述べたように、オヴチャラの虐殺はクロアチア紛争において最も大規模なものであり、祖国戦争に関する教育でも必ず学習される。

現在、この記念館はオヴチャラの集団墓地の近くにあり、オヴチャラの虐殺が起きた15年後の2006年11月20日に、「セルビアのヴコヴァル強制収容所捕虜協会」によって開設された。入口には薬きょうが埋め込まれた床が広がり、虐殺現場となった農場の扉がそのまま使用されている。中に入ると、壁一面に犠牲者の写真や名前が書かれ、その足元には彼らの遺品が展示されている。集団墓地から発掘された遺品は、身分証や時計、ロザリオなどさまざまである。この施設の中央にも、うずまき状の小さな空間（ここは膝より低い）があり、赤いライトで表示された犠牲者の名前が円を描きながらそのうずまきの中心部に吸収される演出がなされている。

この記念館はヴコヴァルで訪れるべき場所の一つとなっており、集団墓地とともに当時の虐殺について考えさせるようになっている。きわめて知名度の高い虐殺を展示する記念館であり、ヴコヴァル市民に限らず、クロアチア人全体にアピールする場となっている。虐殺の悲劇を視覚的に表現することによって、虐殺の記憶を共有させ、それを強固にする機能も果たしている。

4) ヴコヴァル市立病院

ヴコヴァル市立病院（以下、市立病院）は、紛争当時負傷した兵士や市民を民族の分け隔てなく受け入れ、ヴコヴァルがJNAによって包囲され攻撃にさらされた際も、地下で治療を続けていた。当時の市立病院のスタッフらの懸命な働きぶりや、のちにオヴチャラ虐殺に巻き込まれた彼らの悲劇的な死を踏まえると、ヴコヴァルの戦いはこの病院抜きに語ることができない。

現在、市立病院は医療機関として機能しているが、その地下には戦時病院の様子を伝える展示がされている。地下の展示フロアに入るとまず、戦時中のヴコ

ヴァルや病院の様子が記録されたDVDが上映される。そして、壁に犠牲者の名前や紛争の時系列が書かれた廊下の先には、いくつかの部屋にわたって戦時中の病院の様子が当時の器機や人形で再現されている(図11)。3段ベッドが所狭しと置かれた部屋を抜けると、最後に鏡張りの部屋にたどりつく。その部屋の中央には電燈のロウソクだけが置かれ、犠牲となった人々を追悼する空間となっている。

市立病院は、11月に開催される記念式典の行事においても重要な場所の一つになっている。11月18日のメインイベントの前夜には、市立病院中庭の記念碑の前でロウソクが点灯され、その様子はテレビ中継される。そして18日には、警察音楽隊による合唱の後、ここを起点に郊外の記念墓地までの行進が行われる¹⁸⁾。

このように、市立病院はヴコヴァルの戦いを語る上できわめて重要な場所であり、当時の展示や記念式典の中心地となることから、戦争記憶を留める重要な場所であることは明らかである。それは、ヴコヴァル市内のローカルレベルだけでなく、クロアチア国内のクロアチア人全体に共有される記憶であり、市立病院がナショナルレベルで共有される戦争記憶の象徴となっている。

4. 犠牲者追悼記念式典

ヴコヴァルでは、この町が陥落した11月18日に、毎年大規模な記念式典が行われる。記念式典には、「ヴコヴァル—特別な崇敬の場所」というタイトルが

つけられている。2006年から始められたこの記念式典は、ヴコヴァル市が主催し、ヴコヴァル・スリエム郡とクロアチア共和国がサポートをしている。11月18日を中心に、前後3日間ほど関連の行事もあわせて行われる。ここでは、2015年11月18日の記念式典に参加した際に確認したことをもとにまとめる。

式典は午前8時から終日、連続して行われる。当日は国内各地からテレビ局が集まり、記念式典の様子がSNSやニュースなどでリアルタイムに伝えられる。中でも注目されるのが「記憶の行進」である。政府要人から一般市民まで数万の人々がヴコヴァル市立病院の中庭に集まり、そこから郊外にある記念墓地までの約5 kmを、給水塔跡や死者の名前が書かれた垂れ幕を目にしながら歩くものである(図12)。

11月18日はクロアチアの祝日ではないが、この日は国内各地から多くの人々がヴコヴァルに集結する¹⁹⁾。報道によると、ヴコヴァルの戦いから25年経った2016年は10万人、2019年は6万5千人の人々が訪れたという²⁰⁾。

午後6時には「私の町でもヴコヴァルは光っている」というイベントが開始される。これは国内の多くの都市にある「ヴコヴァル通り」(ない場合はメイン通り)で同時にロウソク点灯を行い、ヴコヴァルの戦いで犠牲になった死者を追悼するものである。ヴコヴァルの名前のついた通り²¹⁾で同じ時間に同じ行為をすることにより、ヴコヴァルから離れた場所でも人々は追悼の一体感をもつことになる。

図11 ヴコヴァル市立病院内にある紛争時の再現展示
(2015年11月17日撮影)

Fig. 11 Conflict exhibit in Vukovar City Hospital

図12 記憶の行進
(2015年11月18日撮影)

Fig. 12 Memorial March in Vukovar

図13 歴史的な衣装を着た記念式典参加者
(2015年11月18日撮影)

Fig. 13 Participants in a ceremony wearing traditional Croatian dress

記念式典には、クロアチア大統領を筆頭に政府要人や、ヴコヴァルの姉妹都市の関係者が参加する。また記念墓地での行事には聖職者や軍人などの姿も見られる。そのほか、国内各地の伝統的な戦士の衣装を着た人々も見られる（図13）。これらの衣装はヴコヴァルの戦いとは関係なく、クロアチアの歴史や伝統文化をアピールするものであり、ここにはクロアチア人意識を高揚させようとする意図が透けて見える²²⁾。このように、この式典は国内各地からの参加者を呼ぶ国家的行事になっている。

5. セルビア系住民のコメモレーション

ここでは、ヴコヴァルのセルビア系住民にとっての紛争に関するコメモレーションを整理する。

ヴコヴァルの戦いでは、多くのセルビア人で構成されたJNAによるクロアチア人の殺害や強制労働などがクローズアップされがちである。しかし、紛争が始まると、JNAによるヴコヴァル包囲以前にクロアチア人とセルビア系住民の関係は急激に悪化し、クロアチア人によってセルビア系住民が殺害されるケースも多く見られた。紛争中に殺害されたセルビア系住民は150人にのぼったという²³⁾。

現在、セルビア系住民によるコメモレーションはわずかながら見られるが、それらはクロアチア人のコメモレーションと大きく異なり、小規模であったり、場合によっては事件についての表象もされていないことがある。ここでは、まずセルビア系マイノリティのコ

図14 セルビア系住民犠牲者の記念広場
(2016年9月1日撮影)

Fig. 14 Memorial site for Serbian victims of the conflict

メモレーションを整理し、つぎになぜそのような規模にとどまるのかを、セルビア系住民のための記念碑と記念行事に着目して検討する。

1) セルビア系住民犠牲者の記念広場

市街地にある聖ニコライ教会から数百m南下すると別のセルビア正教会がある（現地のセルビア系住民は主にこの教会に通う）。その正教会の脇にある、直接道路には面していない広場に記念碑は設置されている（図14）。現地のセルビア系住民への聞取りによると、この記念碑は1994年頃、ユーゴスラヴィア支配下で建設されたという。一帯はセルビア系住民が多い地区であり、広場の中央に置かれた十字架を中心にして、左右にそれぞれ13名のセルビア系住民の犠牲者を悼んだ墓石のような碑が建てられている。墓のように見えるが、遺体は全てセルビア本国に運ばれている。石碑には個人の顔写真と名前がキリル文字で書かれており、現地調査時には全ての石碑の前に新しい花束が置かれていた。

2) ドナウ川での花流し

毎年6月28日²⁴⁾にセルビア系住民の遺族がヴコヴァル市内のドナウ川河畔に集まり、犠牲者を追悼するために花を流す。紛争中、クロアチア人によって殺害されたセルビア系住民の遺体は、どこかに埋められるかドナウ川に流されるなどされたからである。花を流す場所には特に目印となるものはなく（図15）、この行事は遺族らが静かに花を流して終わる。

3) 不可視化される犠牲

紛争時のヴコヴァルでは、クロアチア人だけでなく

図15 花流しが行われるドナウ川河岸
(2016年9月1日撮影)

Fig. 15 Serbian commemoration site on the banks of the Danube River

セルビア系住民も犠牲になったが、彼らの多くは今なお口をつぐまねばならない状況にある。セルビア系住民が自分たちの犠牲について話すことは、クロアチア人の民族感情を逆なですることにつながりかねない。セルビア系住民が自らの犠牲を主張しないことは、マイノリティである彼らがクロアチアで（たとえ表面上であっても）平穏に生活する工夫であり、そのために現在のヴコヴァルではセルビア系住民の犠牲が見えない状況となっている。

セルビア系住民の犠牲者の数は、今なお把握されておらず、また行方不明の者もある。この地域ではクロアチア人とセルビア系住民の衝突が頻発し、特に紛争前にはセルビア系住民（もしくはセルビア系住民を配偶者にもつクロアチア人）は、クロアチア人に理由もなく殺害されたり、連れ去られたりした。このようなクロアチア人による紛争時の犯罪は、紛争後も咎められておらず、セルビア系住民遺族が保険などを申請しても認可されないなど、一方的に不利な状況にあるという²⁵⁾。

クロアチア人によるセルビア系住民の殺害は当時突発的に生じていたが、たとえばボロヴォ地区の事件が挙げられる。ボロヴォ地区はヴコヴァル市北部に位置し、ユーゴスラヴィア時代から有名な靴・ゴム工場では多くの工場労働者が従事していた。1991年11月ボロヴォの工場にあった核シェルターに市民が集まっていたところ、数人のクロアチア人がセルビア系住民だけを連れ出し、ボロヴォ地区の公園に集めて殺害した（図16）。殺されたセルビア系住民は15人ほどである

図16 ボロヴォ地区のセルビア系住民殺害現場
(2016年9月1日撮影)

Fig. 16 Site of a Serbian massacre in Borovo district, Vukovar

が、殺害の詳しい理由や背景はわかっていない。

セルビア系住民殺害の現場となった公園も維持されているが、ここが紛争中に殺人の事件現場となったこと、十数人のセルビア系住民が殺害されたことは一切示されていない。

紛争中にこのような事件が発生し、自分の親族や友人が犠牲になっても、彼らはセルビア系住民というナショナル・マイノリティであり、犠牲を声に出すことは現在に至るまでほとんどなされていない。クロアチア人とセルビア系住民の微妙で繊細な関係が、セルビア系住民犠牲者の主張を内に閉じ込め、不可視化させてしまっている。

6. 小括：戦争記憶とコメモレーションの関係

1) クロアチア人の記憶とコメモレーション

クロアチア人の記憶の表象については、すでにローカルレベルとナショナルレベルでそれぞれ整理した。ここでは、そうした記憶の表象とコメモレーションの関係についてみてみよう。

まず、ローカルレベルでの記憶の表象は、実際に起こったことを直接的に、もしくは家族や知人を通して間接的に体験している地域の人々を対象にして、その記憶の維持・継承を促すものになっている。そのために、JNA、つまりセルビア系勢力の進攻によって地区の人々が犠牲になったことがじかに理解できるような形態をもち、ときにセルビア系住民に対する深い憎悪感情にまで発展するような景観を保持している。

たとえばボグダノヴツィでは、歴史の歪曲化とも思

えるような独特の解釈によって地区の住民に対して蛮行を行うセルビア人の歴史的な連続性を強調している。また、興味深い特徴として、地区の人々と死者の距離が近く、かつ死者が英雄化されていることである。すなわち、家族や身近な住民の死は遺族らにとって深い喪失感を与えるため、死者を顕彰してその死が無駄ではなかったという言説のうちに喪失感を埋めるのである。実際、この象徴型で表象される地区の犠牲者は自ら命を捧げた兵士というより、多くは不条理に殺害された一般市民である。そして、ときに死者は生きている私たちに語りかける形で、自分たちの犠牲は意義ある死であったと折り合いをつけているのである。

つぎに、ナショナルなレベルでの記憶の表象について検討する。すでに指摘したように、このレベルでの記憶として、ヴコヴァルの戦いにおける戦争の記憶がクロアチアの国民的記憶の一つとして位置づけられながら、実際にはセルビア系住民を含まないクロアチア人が対象になっている。

ここに該当するコメモレーションに共通するのは、その表象が抽象的であり、あるいはクロアチアの伝統的な衣装を利用している点である。ノラ（2000: 35）も指摘するように、ここでは必ずしも立地場所は重要ではなく、コメモレーション自体が示す顕彰にこそ意味がある²⁶⁾。ヴコヴァルの戦いの直接的な記憶をもたない外部者によって設置され、その抽象的な形態から、見るものにさまざまな解釈の余地を与える。

938本の白い十字架を前にして、自分とは直接関係のないクロアチア人に思いを馳せることは、エスニック・クロアチア人という集団の記憶を想像し、共同体としての意識を創造することにつながる。また、記念施設において、JNAの進攻による被害やそれによる犠牲者の示すだけにとどまらず、JNAの武器や戦車を踏み台として使用する演出は、見学に訪れたクロアチア人（この場合クロアチア・エスニックだけに限らない）の生徒は戦争記憶を迫体験させ、若いクロアチア人にもその記憶が継承されていくのである。

ヴコヴァルにおける「記憶の行進」も同様の意味があると考えられる。追悼儀式で行われる行進には、時空を超えた事実の再確認と迫体験を重視する目的があり、そこにはその戦争記憶を記憶し続ける意味があるとする指摘（関沢2010）を待つまでもなく、紛争後

に国家やヴコヴァル外部から積極的に行われたさまざまなコメモレーションによって、ヴコヴァルはクロアチア人の戦争に関する国民的記憶を形成する空間となったのである。いずれにおいても、そこに国内に暮らすセルビア系住民の入る余地はない。

2) セルビア系住民の記憶とコメモレーション

クロアチア人固有の歴史や文化を強調するクロアチア人のコメモレーションと比較すると、セルビア系住民のコメモレーションは彼らが多数を占める場所であれば、ほとんど目立たない。そこにはいくつかの背景がある。

一つは、セルビア人がクロアチアをかつて攻撃した敵国であるという事実である。この事実によって、一部のクロアチア人はセルビア系住民に対していまだ根深い憎悪感情を抱いており、またクロアチアの愛国主義者は敵対的な態度をとる。ときには記念式典の11月18日にヴコヴァルに多くの市民が集まった際に、退役軍人ら一部のクロアチア人がヴコヴァルにおけるキリル文字使用を容認できないと大々的に主張する（図17）。キリル文字はセルビア人と同義であり、このようなクロアチア人の動きはクロアチアに住むセルビア系住民を排斥する運動ともとらえられるのである（図18）²⁷⁾。

セルビア系住民がクロアチア人社会におけるマイノリティであることも、彼らのコメモレーションをめぐる活動を抑え込んでいる。彼らは数において、クロアチア人よりも圧倒的に少なく、それゆえにクロアチア

図17 記念式典で見られたセルビア語排斥の旗
(2015年11月18日撮影)

Fig. 17 Flag marking withdrawal of recognition of Serbian as an official national language

図 18 ヴコヴァル市内の落書き。「ヴコヴァル VUK-OVAR は決して (キリル文字の) BYKOBAP にはならない!!」

(2016年9月4日撮影)

Fig. 18 Graffiti in Vukovar

人社会においてセルビア系住民たちの声は届きにくく、かつ声をあげようものならクロアチア人社会からの追放や身の危険を感じることにつながるからである²⁸⁾。

このような背景によって、セルビア系住民は犠牲者追悼の意思を内在化させている。彼らの犠牲者を追悼する動きはあったとしても、その規模は小さく、場合によっては殺害事件の現場を顕彰することもためらうのである。クロアチアのセルビア系政治家や、セルビア系住民向けの新聞は彼らの追悼の必要性を訴えているが、その声は大きくない。セルビア系住民の戦争記憶は、彼らの小さなコミュニティの中でのみ、小規模に継承されているにすぎない。

IV ナショナル・アイデンティティの強化・継承

1. 国民統合のためのクロアチア・ナショナリズム
多くの研究者たちが指摘するように、国民国家によって一側面のみ選択された戦争記憶は、顕彰されることによって国民にナショナル・アイデンティティを想像させ、国民意識を統合する役割を果たす²⁹⁾。クロアチアのヴコヴァルの戦いにおける戦争記憶の表象を分析すると、表象の対象はクロアチア人に絞られていることが明らかになった。つまり、国家によって選択され顕彰される戦争記憶は、セルビア系住民のようなマイノリティを含むクロアチア国民よりも、むしろクロアチア人のためのものになっている。クロアチア人は総人口の圧倒的多数を占めるだけでなく、戦争記憶

の表象の面から見ても、クロアチアはクロアチア人の国家、すなわち自民族中心の国民国家であることがわかる。

ナショナル・アイデンティティを強化し、次世代へ継承するような積極的な動きが現在のクロアチアで起きている理由を検討する上で、こうしたクロアチア人中心の国家がなぜ形成されたのかを考える必要がある。ここではクロアチアの歴史から生まれたクロアチア独自の政治的動きがあることをまとめておく。

まず、国家建設を強く求めてきたクロアチアの歴史を挙げることができる。クロアチアは、他国による国土分割を繰り返し³⁰⁾、多民族国家に内包される歴史を経てきた。このような背景から、中世クロアチア王国の版図並みの国土回復に対する強いこだわりを生んだ。このこだわりは、クロアチアでは多民族国家ユーゴスラヴィアからの自治獲得や分離独立が何度も図られていたことや、第二次世界大戦中のクロアチア独立国³¹⁾の時代に、一時的ではあれクロアチアの歴史的版図が回復されたことなどから見て取れる。戦後のユーゴスラヴィア時代にクロアチアは再び領土を分割されたことから³²⁾、領土と主権の回復は悲願であった。

エスニック・クロアチア人の分布が現在のセルビア北部のヴォイヴォディナ地方やオーストリア東部のブルゲンラント州にまで及んでいることも、国土保全に対する関心を高めることになった。第一次世界大戦後、東ヨーロッパでは民族自決による主権国家を成立させることが可能になったが、クロアチアは当時の国際情勢を踏まえてセルビアなどの周辺諸国と連携を取り、ユーゴスラヴィアを成立させた。クロアチア人中心の国家が建設されなかったことを不服とする声が高まり³³⁾、クロアチア人は自らのエスニックの独自性を強調するとともに、国土の確保に強い関心をもつようになっていった。

つぎに、クロアチアの脱バルカン・親ヨーロッパ志向が挙げられる。クロアチアは地理的にも文化的にも自らをヨーロッパの一国家ととらえており、また「バルカン」という語が後進的で否定的なイメージをもつことから、バルカン諸国とみなされることに嫌悪感を抱いてきた(定形 2006, コレン 2008)。こうした意識から、クロアチアは脱バルカンや脱ユーゴスラヴィアを強く求め、多民族国家からの独立に向かうことに

なった³⁴⁾。

ローマカトリックの信仰やラテン文字の使用、ドイツなど西ヨーロッパ諸国との積極的な人的交流や貿易、アドリア海沿岸でのインバウンドツーリズムに向けた観光開発などは、明らかに西ヨーロッパとの連携を強めてきた。そして2013年のEU加盟は、セルビア以南の旧ユーゴスラヴィア諸国と袂を分かち、ヨーロッパの一員になることを確定させる機会となった。

以来、クロアチアは独立のために多大な犠牲を払った国であることを積極的にアピールしている。ヴコヴァルの被害は国際世論の同情を集め、独立の正当性を確固たるものにした。しかも、ヴコヴァルはセルビア人による攻撃の犠牲になったとともに、戦略上の犠牲も強いられた。そのためにヴコヴァルの犠牲を榮譽あるものとして国を挙げて称え、クロアチア国家建設のために追悼することで、紛争の意義を強調することになった。

さらに、こうしたクロアチアの歴史的経緯がクロアチアのナショナリズムを活発化させ、クロアチア人による国民国家の成立に邁進することになった。クロアチア国民の統合に際して、戦争の記憶は重要な手段であり、国家はそれを最大限に利用している。加害者であるセルビア人が登場する紛争の物語は、クロアチア人の連帯意識を強め、クロアチア人からなる国民国家の成立を確固たるものにしつつある。クロアチア人主体の国民国家クロアチアは、戦争記憶を毎年想起させることでクロアチアのナショナル・アイデンティティを強め、紛争を直接経験していない次の世代にその意識を継承させようとしている。

一方、国内の地域レベルでは、国家レベルとは異なるアイデンティティの強化・継承がなされている。国家レベルでは、紛争の記憶を直接経験したことのない国民にも想像・共有させ、国民の一人であるという想像力を養わせた。これに対して紛争の起こった地域レベルでは、紛争は想像されるものではなく経験であり、そこでの戦争記憶は、犠牲となった家族や知人を追悼し、英雄視することによって喪失の穴をふさぐ機能をもっている。そしてクロアチア人の犠牲への悲しみは、セルビア人が敵であった事実を前にして、クロアチア人同士で被害者意識を共有することによって慰められる。ここでは感情的な戦争記憶が、その地域のクロア

チア・エスニックの記憶として留められる。これによってクロアチア人のナショナル・アイデンティティは地域で共有され、継承されていくのである。

以上をまとめると、クロアチアのセルビア系住民は、国家レベルと地域のレベル両面において、それぞれ侵略者・加害者としてみなされることにより、クロアチア人の連帯感を高める結果になっている。

2. クロアチアのマイノリティ保護要請

歴史的にヨーロッパを志向してきたクロアチアは、独立の後にEC（現EU）加盟を目指し、2013年に実現させた。そこには、自由な資本主義社会への参入を求めるクロアチアと、経済規模の拡大のために拡大を続けるEUの思惑の一致がある。

ただし、EUは多民族共生を理想に掲げており、EU加盟には国内のマイノリティ保護政策を実施が前提となる。そこで、EUが打ち出す条件には法的権限がないものの、加盟を目指すクロアチアはマイノリティ集団に対する政策を新たに打ち出すことになる。

そもそも独立紛争以来、クロアチアではトゥジマン大統領によるクロアチア人優先の強引な政策が続けられてきた。しかし、それは次第にクロアチアの国際的な孤立を招いた。民族主義が前面に出す政権下では、EU加盟に必要なマイノリティ保護に関する法整備もおざなりになっていた。1999年のトゥジマン大統領の死後、政権が左派連合へ移行したことをきっかけに、2000年以降クロアチアはEUへアピールするために大きく舵を切った。その一つが、クロアチアにおけるマイノリティ保護政策の整備である。

マイノリティ保護に関する重要な法律は主に3点ある。1点目は「クロアチア共和国におけるナショナル・マイノリティの言語と文字の使用に関する法律」である。これにより、各自治体でマイノリティが総人口の3割以上を占める場合、マイノリティの使用する言語や文字を公共の場で使用することが義務づけられ、公的機関ではクロアチア語と共に二言語表記されることとなった。また、マイノリティのための新聞が各地で発行されるようになり、マイノリティによる活動の後押しが図られた³⁵⁾。2点目は「ナショナル・マイノリティの言語と文字による教育に関する法律」の制定であり、これによって学校でマイノリティの使用する言

語や文字が尊重され、マイノリティ向けの特別授業が行われる配慮を施した。3点目は「国会議員選挙法十七条」によってクロアチア議会での各マイノリティ代表の選出が義務づけられることになった。たとえばセルビア人の場合、代表1名の枠が設けられており、現在はセルビア系マイノリティの代表である独立民主セルビア人党 (SDSS) が3名の議員を議会に送っている。

このほか法整備とは別に、1997年に設立されたクロアチアのセルビア系住民を統括する組織として「セルビア民族会議」がクロアチアのほぼすべての郡に支部が置かれている。セルビア民族会議を中心に、さまざまなセルビア系団体がクロアチア政府と協調して、「セルビア人の人権擁護とアイデンティティの構築と二本柱として多様な文化活動を」行っている (百瀬 2017: 217)。

また、クロアチア紛争によって国外へ逃れたセルビア系難民の帰還事業も、2000年以降なされている。

こうした政府の動きにより、マイノリティにとって理想的な法律が整備された。この動きはEUも高く評価しており、「クロアチア政府が域内のナショナル・マイノリティの権利向上を促進すること」が期待され (百瀬 2014: 175, 176)、そのことがクロアチアのEU加盟へとつながった。

3. ナショナル・アイデンティティの強化・継承が生む問題

1) ヴコヴァルにおけるマイノリティ保護政策の現実

マイノリティ保護政策が制定された一方で、紛争後、国家統合のためにナショナル・アイデンティティの強化を続けてきたクロアチアでは、すでにいくつもの問題が生じており、一部のナショナル・マイノリティの生活に影響が出ている。

クロアチアにはさまざまなナショナル・マイノリティがいる。しかし、たとえばイストリア半島のイタリア系住民やスラヴォニアのハンガリー系住民は、クロアチア人の間に目立った問題を抱えていない。しかし、セルビア系住民とクロアチア人に関していえば、紛争によって両者の関係は亀裂が生じたままであり、ヴコヴァルではマイノリティ保護の理想と現実の乖離が鮮

明になっている。このような地域の問題が解決されない限り、クロアチアは完全にマイノリティの権利を保護できているとはいえない。セルビア系住民マイノリティがクロアチア社会で抱える問題を、ヴコヴァルを例にして考察する。

ヴコヴァルでは、1998年に市内にセルビア領事館³⁶⁾が置かれ、2019年現在では23名で構成されるヴコヴァル市議会にSDSSに所属するセルビア系の議員が3名加わっている。一見セルビア系住民マイノリティの権利が十分保護されているような体制に見えるが、いまだ十分とは言えない現状が見られる。まず挙げられるのは、図19に見られるような一部のクロアチア人によるキリル文字への反発である。セルビア系住民が3割以上居住する地域では、彼らの言語が公的に使用されることが認められている。しかし、ヴコヴァルでは現在もそれは十分に実現されていない。このことに対して、現地のセルビア系住民はマイノリティに対する権利が保障されていないと感じている。そのようなセルビア系住民の不満を横目に、2015年にはヴコヴァル市議会で公的表示からキリル文字を削除することを決定した。これはセルビア系住民が歓迎されていないことを示す明確なメッセージであり、彼らはクロアチア人に同化するか、もしくは立ち去るかの二択しかないという強烈なものであった³⁷⁾。ヴコヴァル市議会のこのような決定に対してEUは懸念を示したが、マイノリティ保護違反を処罰する法的権限をもっていないこともあり、この決定に対して特別な措置は現在行われていなかった³⁸⁾。しかし、2019年7月、クロアチア憲

図19 シールで隠された二言語表記のプレート
(2015年11月20日撮影)

Fig. 19 Concealed plates with bilingual inscriptions and seals

法裁判所は2015年のヴコヴァル市の決定に反対していた一部の主張を受け入れ、ヴコヴァルにおいて二か国語表記としてのキリル文字を使用することを決定した。このような憲法裁判所の決定が出たにもかかわらず、保守系政党がヴコヴァル市政を握る現在、二か国語表記としてのキリル文字使用に関する市議会決議では混乱が生じ、市としての決定はいまだ持ち越されている³⁹⁾。キリル文字が一部の人々にとって憎しみの対象であり続けている現在、ヴコヴァル市がどのような動きに出るのか、今後の対応が待たれる。

また、ヴコヴァルでは、幼稚園と小学校でクロアチア人とセルビア系住民の生徒の教室が完全に分けられている。これは先に挙げたマイノリティ保護を目的とした教育に関する法を反映したものである。しかし、実際には生徒が民族により二分されており、双方の交流が学校内でほとんどないことからセルビア系住民の間で懸念の声があがっている。現地のセルビア系の生徒によれば、セルビア系住民向けの授業は、言語以外は歴史も含めクロアチア系住民と同じ内容であるという。また、セルビア人教師は、ヴコヴァル郊外のセルビア系住民居住地域にあるトゥルピニャという集落から来ているという（図20）。

そのほかにも、クロアチア紛争時に国外へ逃れたセルビア系難民の全てがクロアチアに帰国してはいないことが問題となっている。セルビア系難民について調査を行った材木（2009）によると、クロアチアに帰国

登録をしたセルビア人12万人のうち、実際にクロアチアに戻ったのは4万人程度にとどまっている。帰国を果たしたセルビア系住民の平均年齢は60歳以上であり、経済状況はクロアチア人よりもきわめて悪い状態にあるという。

こうしたセルビア系住民を取り巻く状況は、クロアチア人を中心としたクロアチアにおいて、マイノリティ政策が積極的になされていないことを反映している。一方、ヴコヴァルではセルビア系住民に対して過度なアフーマティブ・アクションが見られると不満を漏らすクロアチア人もいた。そして、言語以外はマイノリティの権利が保障されているならば、文字くらの権利は小さいことだ、といった権利の保障を無視したクロアチア人の発言も聞かれた。

百瀬（2017）は、セルビア系住民に対する権利向上を目指すセルビア民族会議の使命はクロアチア人共同体との齟齬が生じると想定していた。つまり、クロアチア政府とセルビア系住民に対する権利向上を目指すセルビア民族会議の相反する「祖国戦争」観に妥協の余地はないため、セルビア系住民の権利に関する制度面が整備されても、戦争の「記憶をめぐる認識論的問題」が伏流のように社会の背後に存在していると指摘している（百瀬 2017: 221）。まさに上述の現地の語りは、セルビア系住民の権利に対して現れた「認識論的問題」であり、クロアチア人とセルビア系住民の相互理解はいまだ十分でないことがわかる。平和的な市民レベルの共生の道が模索できないまま時間が経過してしまえば、関係修復はより困難になっていくものと思われる。

2) クロアチア民族政策のダブルスタンダード

クロアチア国内のナショナル・アイデンティティ強調の動きと、EUの要請による国際化への反応が、クロアチアのダブルスタンダード、もしくは国内の対立を生み出していることは、近年日本のバルカン地域の研究者にも指摘されている。山川（2015）は「ネーション化」「ヨーロッパ化」という言葉によってクロアチア国内で相反した現象が起きていることを説明し、百瀬（2014）は、二言語表記「推進派」と反キリル文字運動に現れる「反対派」の対立が国際的な「普遍」への適応と、ローカルな事情の「特殊」の二者間に発生した齟齬であるとしている。

図20 ヴコヴァル市内の小学校にあるセルビア系住民クラスの様子

（2015年11月17日撮影）

Fig. 20 Classroom for ethnic Serbs in a Vukovar elementary school

これらの指摘と現地での調査の結果を反映させて、クロアチアの現状を考察してみよう。

ナショナル・アイデンティティを強化・継承することによって国民統合を図ってきたクロアチアは、一方でヨーロッパの一員となるためのEUの要請を受け入れてマイノリティを保護し、西ヨーロッパ的な国民国家たろうと努めてきた。しかしながら、クロアチアは歴史的な背景からナショナル・アイデンティティを強化・継承する必要性があった。そこでさまざまな人々を受け入れ一国民として統合する国民国家であると対外的にはふるまいながら、国内ではナショナル・マイノリティを考慮しない自民族中心の国民国家たる行いが継続されていた。その一つが、ヴコヴァルにおける戦争記憶の一連のコモレーションである。つまり、それはアンバランスでありながらも民族主義と多民族主義が共存している奇妙な状態であるといえる。このようなダブルスタンダードを生んでしまった背景に、EUが東ヨーロッパの特殊性を十分に理解できていなかったことが考えられよう。すなわち、紛争時の西側諸国の介入がユーゴスラヴィアの民族をめぐる混乱を招き、複雑化させたように、現代もそれと同様の構図が見られるのである。

クロアチア政府が制定したマイノリティ保護政策は、特に民族関係がセンシティブな地域において、現実との大きなギャップに直面していることが明らかになった。法改正によって形式的にマイノリティが保護されるようになったことになり、弱い立場にいるマイノリティの姿は以前より見えなくなっているといえる。一方、マジョリティであるクロアチア人は、「十分な権利を受けている」としてセルビア系住民に対して不満をもつなど、紛争後の両民族の関係改善は思うように進んでいない状態である。クロアチア憲法裁判所の決定はナショナル・マイノリティであるセルビア人を勇気づけるものであったが、憲法裁判所のあるザグレブから遠く離れたヴコヴァルでは、この決定の後もキリル文字に対して大きな反発が生じており、二か国語表記の動きは順調に進んでいない。いまだ紛争の憎しみが消えない地方の現場では、素直にザグレブの決定を受け入れられないマジョリティが多くいる。クロアチアという国家は、当初クロアチア人中心の国家として歩み始めたが、時代の要請に応じてナショナル・

アイデンティティの強化・継承の在り方を変化させていくべきであろう。そうしなければ、平和的な民族の共生と和解の道は市民レベルにおいても困難になり、このままの状態が続けばマジョリティとマイノリティの間で社会の分断が生じてしまうと予想される。ヴコヴァルのセルビア系住民に対してインタビューを行った際、クロアチアのEU加盟前後からセルビア系住民に対して、一部のクロアチア人によるヘイトスピーチが増加している実感があるという話があった。統計的なデータではないが、ナショナル・マイノリティがこのような実感を抱いている点は看過できない。クロアチアでこのようなダブルスタンダードの体制が今後も継続されるならば、同様に多くの民族問題を抱える東ヨーロッパ諸国の社会、ひいてはEU全体にも深い亀裂を生むような影響を生じることになりかねない。

V おわりに

本稿は、クロアチアにおける戦争記憶の表象に着目することによって、ナショナル・アイデンティティの強化と継承を行う理由を解明し、なぜクロアチアでは民族が重視されるのか、そしてクロアチアにおける民族が絡んだ問題はどのようなものであるか、その一端を明らかにした。ナショナル・マジョリティであるクロアチア人の側からだけでなく、マイノリティであるセルビア系住民の側も対比しながら描くことによって、クロアチアで進行しているナショナル・アイデンティティの強化と継承について論じた。

EUによるナショナル・マイノリティ保護の要請に応えたクロアチア政府は、クロアチアがクロアチア人主体の国家であるという内実を抱えつつ、西ヨーロッパ的な国民国家を目指したがゆえに、マイノリティの処遇を巡ってダブルスタンダードを生んだ。このダブルスタンダードの状態が続けば、クロアチアにおけるマジョリティとマイノリティの分断が生じるであろう。しかしながら、自国第一主義が世界で台頭するなかで、憲法裁判所がセルビア人マイノリティの権利を認める決定を下したことは画期的であり、後退していたクロアチアのマイノリティ保護政策の大きな一歩として考えられる。

本稿では、複雑な民族的背景を抱える東ヨーロッパ

と、東ヨーロッパへと拡大したEU、それぞれが抱える現在の問題を念頭に置いた検討も行った。今後どのような展開になるのか予測は難しいが、政治レベルでの早期の和解と歩み寄り強く望まれる。

最後に、政治レベルではこのような民族間の溝ばかりが強調されるが、愛国的な国家の動きとは別に、市民レベルではさまざまな民族共生の運動が起きていることも見過ごせない。実際、ヴコヴァルでも、一部の市民団体が民族を超えた協力や理解を図るためのワークショップを行っている。彼らの地道な活動が、国家の意図するものとは別の形で民族理解を育む一助になる。このような市民の「希望をもった」草の根運動についても、今後目を向けていきたい。

謝 辞

本稿は、2016年に東京学芸大学大学院総合教育開発専攻地域研究教育サブコースに提出した修士論文を、大幅に修正・加筆したものである。

フィールド調査でお世話になった方々、また日本で筆者の研究に御協力いただいた全ての方々にお礼申し上げます。現地ではクロアチア人とセルビア系住民共に、さまざまな体験を聞かせていただきました。そこに眠る人たち、まだ見つからない人たちも含めて、心より感謝いたします。

本稿の一部は、2018年日本地理学会春季学術大会においてエスニック地理学研究グループで発表した。

注

- 1) EU加盟国だが、通貨は独自通貨のクナを使用する。また、シェンゲン協定は実施していない。
- 2) 2011年国勢調査による。
- 3) 1925年には、中世クロアチア王国の「千年祭」が開催された。
- 4) 第二次世界大戦の「兄弟殺し」の記憶は、1990年代のユーゴスラヴィア紛争で再び持ち出され、クロアチア、セルビアは共に、第二次世界戦時に起きた双方の残虐行為をプロパガンダとして利用した。
- 5) クロアチア人の歴史家、政治家（1922～1999年）。ユーゴスラヴィア人民軍退役後、1971年の「クロアチアの春」では民族主義的な言動が問題となり、ユーゴスラヴィア政権下で投獄される。1990年にはHDZの党首として臨んだ選挙で大勝、クロアチア独立の立役者となる。「クロアチア建国の父」ともいわれるが、その民族主義者としての過激なまでのふるまいのため、彼の死後その評価は見直されている。
- 6) クロアチア語とセルビア語はアクセントや一部単語が異なる以外、きわめて類似した言語である。ただし、クロアチア語はラテン文字（ヴコヴァルはVukovar）、セルビア語はキリル文字（同じくВуковар）を使用するため、表記されることによって両言語の違いは明確になる。1990年7月にはセルビア人が多く住む地域でもラテン文字使用の義務化が決定された。
- 7) なお、この点について月村（2007: 47, 48）は、実際にクロアチア東部に住むセルビア系住民の当時の心理状態を、「ある程度の規模の住民が纏まりつつ入り交って居住している場合（混住）は、民族的多数派からの攻撃を受けるのではないかという恐怖が生ずる可能性が非常に高い」という「民族的少数派」となる恐怖として説明している。
- 8) 郡を構成する単位の一つで、市よりも小規模なもの。
- 9) もっとも、ヴコヴァルには何世代にもわたって長く定住しているセルビア系住民と、定住の歴史が比較的浅いセルビア系住民の二つのパターンがあるため、第一波のセルビア系住民を考慮すれば、ヴコヴァルのセルビア系住民がクロアチア系住民と共存できていなかったとは一概にいえないう。
- 10) 一方、戦時中JNAはヴコヴァル内のセルビア人居住区をあらかじめ把握していたため、その地区はJNAの被害を受けることはなかった。真新しい家々が立ち並ぶヴコヴァル市内には老朽化した家屋の多い地区も残されているが、その多くはセルビア人居住地区である。
- 11) ヴコヴァル在住のセルビア系住民であり、セルビア系住民向け新聞*izbor*の編集長スラヴコ・ブバロ氏による。また、夫または妻がセルビア人の場合、本人がクロアチア人であっても、連れ去られて行方不明になったり、殺害されたりするケース

- があったという。
- 12) アルプヴァクスによれば、石造物の物質的な永続性が集合的記憶に寄与しているという（アルプヴァクス 1989）。
 - 13) フランスの歴史学者ノラが提唱した「記憶の場」とは、「平等で均質な個人しか認めようとしなない社会における、帰属集団を見分けるしるし」であり、物質的・象徴的・機能的な要素をもっている場を意味する（ノラ 2000）。
 - 14) チェトニクとは本来、第二次世界大戦時のセルビア民族主義に基づく反ファシズム組織を指すが、1990年代の紛争で一部のセルビア軍はチェトニクと自称した。
 - 15) たとえば祖国戦争教育の教科書（Barič et al. 2015）の表紙には、給水塔の写真が載っている。
 - 16) クロアチアの初等教育は8年、中等教育は3～4年である。
 - 17) メモリアルセンターホームページによる。
 - 18) ちなみに警察音楽隊の唱歌では、ヴコヴァルのあるスラヴォニア地域とは全く関連性のない、ダルマティア地方の伝統的な男性混声合唱であるグラッパも披露されていた。
 - 19) 祝日とはなっていないが、1999年クロアチア議会はこの日を「1991年ヴコヴァル犠牲者を想起する日」として記念日に制定した（百瀬 2014: 167）。
 - 20) 2016年11月18日の参加者数は、クロアチア日刊紙ヴェチェルニイリストのウェブサイト記事による。Večernji List, Kolona sjećanja: Gotovo 100 tisuća ljudi u Vukovaru, Gra-bar-Kitarović hodala s 'djevojčicom u plavom ka-putiću' (released 18 Nov. 2016) <http://www.vecernji.hr/hrvatska/najvecu-cast-onima-koji-su-umrli-za-nasu-slobodu-cinimo-borbom-za-srecu-onih-koji-su-prezivjeli-1129369> (last accessed 9 Jan. 2017)
 - 2019年11月18日の参加者数は、クロアチア国内紙Dnevnikのウェブサイト記事による。DNEVNIK.hr, Piše D.I: Tisuće ljudi u Vukovaru i Škabrnji: Niz Dunav pušteni vijenci i 700 lampiona, kao tužno sjećanje na sve žrtve u Domovinskom ratu (released 11 Nov. 2019) <https://dnevnik.hr/vijesti/hrvatska/krsticevic-u-skabrnji-hrvatsku-danas-cuva-mocna-vojska-kako-se-ovakvi-zlocini-nikada-ne-bi-ponovili-583530.html> (last accessed 20 Dec. 2019)
 - 21) 「ヴコヴァル通り」を意味する Vukovarski ulica または Ulica Grada Vukovara は、2019年7月3日時点でクロアチア国内に61カ所確認できた。ただし、これらの通り全てで追悼式が行われているかは確認できなかった。
 - 22) ただし、それが国内各地の地域的な組織と関連したものかどうかは確認できなかった。
 - 23) スラヴコ・ブパロ氏への聞き取りによる。
 - 24) 6月28日は「ヴィドヴダン」という聖ヴィトゥスにちなんだセルビア正教会の聖者を祭る日であると同時に、1389年にコンヴォの戦いでオスマン帝国に敗れた中世セルビア王国が領土を失った日であり、セルビア人にとってきわめて重要な日である。
 - 25) ヴコヴァルのセルビア人遺族団体の代表のスロボダン・ヤコヴリエヴィチ氏の聞き取りによる。彼は紛争前に父親をクロアチア人の襲撃によって亡くした。遺族団体の規模は小さく、セルビア人犠牲者の数に比べて加盟者は少ないという。
 - 26) ノラは『記憶の場』において、彫像や戦没者慰霊碑などのモニュメントも（記憶の）場となり、そのような場の意義は内在的な存在であると指摘している（ノラ 2002: 35）。
 - 27) ヴコヴァルにおける反キリル文字運動については、クロアチアのEU加盟を見据えた動きを論じた百瀬（2014）が詳しい。
 - 28) 毎年11月18日に個人商店を閉めるセルビア人が1件確認できた。マジョリティの戦争記憶が強化され、継承されるコモレーションに直面すると、セルビア人はこうした小さな抵抗、もしくは自己防衛をしている。
 - 29) たとえば石田（2000: 12）は『記憶と忘却の政治学』で、「記憶という行為はある側面の忘却、そして別の側面の想起によって現在の立場から過去を再構成し、それによって未来への行為を意味づける作用をもつ」と指摘している。つまり、「記憶は過去と未来の間にある行動主体が、現在において行なう…選択を伴う行為」となる。この石田

- の記憶に関する考えは、ルナンがかつて「国民の存在とは日々の人民投票」と例えたことに通じていよう（ルナン 1997: 62）。
- 30) 近代のクロアチアの国土は、ダルマティアの大部分をヴェネツィアに、ボスニアの大部分をオスマン帝国に支配され、中世クロアチア王国から各地域が分断された「残部の残部」となった歴史がある。
- 31) 1941年クロアチアのファシズム組織ウスタシャが中心となって成立したナチス・ドイツの傀儡国家。国家の領域はボスニア・ヘルツェゴヴィナ全土を含んでおり、それは中世クロアチア王国と最大版図と同等であった。
- 32) クロアチアのスラヴォニア地方の一部にあるスレム地域は、ドナウ川とサヴァ川の間であり、セルビア人とクロアチア人の混住地域であった。スレム地域は、東部はセルビア共和国のヴォイヴォディナ自治州に、西部はクロアチア共和国に分割された。独立後のクロアチアの歴史教科書では、ユーゴスラヴィアによる国境策定でのスレム地域の喪失が強調されている（石田 2011: 6）。
- 33) これは「クロアチア問題」として第一のユーゴスラヴィア内でくすぶり続けた。この問題は「南スラヴの統一国家の中に、長年にわたり異なる歴史的経緯をたどってきたセルビア王国の領域とクロアチアの領域とが結びつけられることによって、必然的に引き起こされたといえる」（柴 1996: 63）。
- 34) クロアチア独立国が、自民族をスラヴ民族から峻別し、セルビア人の虐殺を行ったことについては、「西洋への帰属を望む願望の裏返しでもあった」という見解（清水 2007）もある。
- 35) スラヴォニアのセルビア人マイノリティを対象にしている地方新聞 izbor は、2007年に創刊されている。
- 36) 1996年9月9日クロアチア共和国は隣国セルビア共和国と外交関係を樹立し、これを契機にクロアチア国内にセルビア領事館が設置された。領事館は国内のセルビア系住民の権利保護に重要な拠点となった。なお、セルビア共和国とは、クロアチア紛争の戦争犯罪に関する解釈の違いで対立が現在も続いている。毎年11月に行われる追悼記念行事では、郊外の墓地まで徒歩で歩くルートの中でセルビア領事館があり、2015年イベント参加時には領事館の前を数名の警官が警戒に当たっていた。領事館に向かってつばを吐きかける者の姿も確認できた。
- 37) B92, Croatian town's removal of Serbian Cyrillic "clear message" (released 17 Aug. 2015): http://www.b92.net/eng/news/region.php?yyyy=2015&mm=08&dd=17&nav_id=95124 (last accessed 28 Dec. 2019) による。
- 38) B92, EU: Cyrillic issue in Vukovar not in our competence (released 19 Aug. 2015) http://www.b92.net/eng/news/politics.php?yyyy=2015&mm=08&dd=19&nav_id=95141 (last accessed 10 Jan. 2017) による。
- Council of Europe, Council of Europe supports use of minority languages in public signs (released 21 Aug. 2015) https://www.coe.int/en/web/portal/home/-/asset_publisher/CWAEcQDHgT3y/content/council-of-europe-supports-use-of-minority-languages-in-public-signs?inheritRedirect=false&redirect=http%3A%2F%2Fwww.coe.int%2Fen%2Fweb%2Fportal%2Fhome%3Fp_id%3D101_INSTANCE_CWAEcQDHgT3y%26p_p_lifecycle%3D0%26p_p_state%3Dnormal%26p_p_mode%3Dview%26p_p_col_id%3Dcolumn-2%26p_p_col_count%3D1 (last accessed 28 Dec. 2019) による。
- 39) ヴコヴァル市議会の決定は、国内外で批判を呼んだ。ヨーロッパ評議会は少数民族の権利保護の観点から懸念を表明した。クロアチア国内でも当時のイヴォ・ヨスイボヴィチ大統領やヴコヴァルのジェリコ・サヴォ市長でさえ反対の立場を取った。なお、上記の2名は中道左派のSPD（クロアチア社会民主党）に所属している。2013年11月の条約改正では、「「祖国戦争」関連施設へのキリル文字の導入は例外的に避けられ」（百瀬 2014: 182）る措置がとられたが、翌年2014年6月にサヴォが僅差でHDZ所属のイヴァン・ペナヴァに市長の座を明け渡して以降、ヴコヴァルにおける公共施設でのキリル文字禁止の動きが加速した。

クロアチア憲法裁判所の決定に関しては、クロアチアのテレグラム紙および独立民主セルビア人党 (SDSS) の記事を参照した。

Ustavni sud donio je važnu presudu: Srbi u Vukovaru dobivaju veća prava na svoj jezik i pismo (released 12 Jul. 2019)

<https://www.telegram.hr/politika-kriminal/ustavni-sud-donio-je-vaznu-presudu-srbi-u-vukovaru-dobivaju-veca-prava-na-svoj-jezik-i-pismo/> (last accessed 29 Dec. 2019)

Ustavnu sud: Vlast u Vukovaru mora povećati prava srpske manjine! (released 12 Jul. 2019)

<http://sdss.hr/ustavnu-sud-vlast-u-vukovaru-mora-povecati-prava-srpske-manjine/> (last accessed 29 Dec. 2019)

文 献

アルヴァックス, M. 著, 小関藤一郎訳 1989. 『集合的記憶』 行路社.

Halbwachs, M. 1950. *La mémoire collective*. Paris: Presses Universitaires de France.

栗津賢太 2000. ナショナリズムとモニュメンタリズム——英国の戦没記念碑における伝統と記憶. 大谷栄一・川又俊則・菊池裕生編著『構築される信念——宗教社会学のアクチュアリティを求めて』 113–131. ハーベスト社.

栗津賢太 2006. 集合的記憶のポリティクス——沖縄におけるアジア太平洋戦争後の戦没者記念施設を中心に. 国立歴史民俗博物館研究報告 126: 87–118.

アンダーソン, B. 著, 白石 隆・白石さや訳 2007. 『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』 書籍工房早山. Anderson, B. 2006. *Imaging communities: Reflections on the origin and spread of nationalism* (1991 Revised and Expanded edition). Verso.

石田信一 2003. クロアチアの地方制度とマイノリティ問題. 跡見学園女子大学文学部紀要 36: 1–16.

石田信一 2011. 歴史教科書におけるユーゴスラヴィア連邦時代の評価をめぐる. 跡見学園女子大学文学部紀要 46: 1–14.

石田 雄 2000. 『記憶と忘却の政治学——同化政策・戦争責任・集合的記憶』 明石書店.

久保慶一 2003. 『引き裂かれた国家——旧ユーゴ地域の民主化と民族問題』 有信堂高文社.

コレン, S. 著, 百瀬亮司訳 2008. 教科書のなかの地域史——クロアチアの事例. 柴 宜弘編『バルカン史と歴史教育——「地域史」とアイデンティティの再構築』 120–139. 明石書店.

材木和雄 2009. クロアチアにおける民族問題とセル

ビア人の地位——その歴史的変遷と内戦終結後の問題状況. IPSHU 研究報告シリーズ 42: 118–143.

定形 衛 2001. 旧ユーゴスラヴィア終焉の諸相——連邦・民族・国際社会 (焦点 旧ユーゴスラヴィアの10年). 国際問題 496: 2–14.

定形 衛 2006. 西バルカン EU/NATO. 羽場久美子・小森田秋夫・田中素香編『ヨーロッパの東方拡大』 295–312. 岩波書店.

柴 宜弘 1996. 『ユーゴスラヴィア現代史』 岩波書店.

清水明子 2007. 「クロアチア独立国」におけるセルビア人虐殺 (一九四一～四二年). 松村高夫・矢野久編著『大量虐殺の社会史』 93–111. ミネルヴァ書房.

関沢まゆみ 2010. 「戦争と詩」の記憶と語り——フランスの二つの事例より. 関沢まゆみ編『戦争記憶論 忘却, 変容そして継承』 159–183. 昭和堂.

月村太郎 2006. 『ユーゴ内戦——政治リーダーと民族主義』 東京大学出版会.

月村太郎 2007. 民族的少数派となる恐怖——旧ユーゴ連邦解体過程におけるセルビア人を例として (周縁からの国際政治). 国際政治 149: 46–60.

ノラ, P. 著, 長井伸仁訳 2000. 記憶と歴史のはざまに——記憶の場の研究に向けて (記憶の場). 思想 911: 13–37. Nora, P. 1996. *Entre Mémoire et Histoire: La problématique des lieux*. Paris: Éditions Gallimard.

ノラ, P. 編, 谷川 稔訳 2002. 『記憶の場』 から『記憶の領域』 へ. ノラ, P. 編, 谷川 稔監訳『対立』 15–28. 岩波書店. Nora, P. 1996. *From Lieux de mémoire to Realms of Memory. Realms of Memory: Re-thinking the French Past*, vol. 1. New York: Columbia University Press.

フット, K. E. 著, 和田光弘ほか訳 2002. 『記念碑の語るアメリカ——暴力と追悼の風景』 名古屋大学出版会. Foote, K. E. 1997. *Shadowed ground: America's landscape of violence and tragedy*. Austin: University of Texas Press.

ボドナー, J. 著, 野村達朗ほか訳 1997. 『鎮魂と祝祭のアメリカ——歴史の記憶と愛国主義』 青木書店. Bodner, J. 1992. *Remaking america: Public memory, commemoration, and patriotism in the twentieth century*. Princeton University Press.

マリタ・スターケン著, 岩崎稔ほか訳 (2004) 『アメリカという記憶——ベトナム戦争, エイズ, 記念碑的表象』 未来社. Sturken, M. (1997). *Tangled memories: The Vietnam War, the AIDS epidemics, and the politics of remembering*. Berkeley: University of California Press.

モッセ, G. L. 著, 宮武実知子訳 2002. 『英霊——創られた世界大戦の記憶』 柏書房. Mosse, G. L. 1990. *Fallen soldiers: Reshaping the memory of the World Wars*. London: Oxford University Press.

百瀬亮司 2017. クロアチア多民族社会におけるセルビア人の自決権——領域的自治の限界か文化的自治

- のジレンマ. 山本明代／パプ・ノルベルト編『移動がつくる東中欧・バルカン史』193-227. 刀水書房.
- 百瀬亮司 2014. ヴコヴァルの反キリル文字運動と「記憶」の双極化. ことばと社会 (多言語社会研究) 16: 160-190.
- 山川 卓 2015. 独立以降のクロアチアにおけるマイノリティ問題——「ネーション化」と「ヨーロッパ化」をめぐる難民政策の変容. 立命館国際関係論集 12: 153-176.
- ルゴフ, J. 著, 立川孝一訳 1999. 『歴史と記憶』法政大学出版局. Le Goff, J. 1988. *Histoire et mémoire*. Paris: Gallimard.
- ルナン, E. 著, 鶴飼 哲訳 1997. 国民とは何か. ルナン, E. ほか著・鶴飼 哲ほか訳『国民とは何か』41-64. 河出書房新社. Renan, E. 1987. *Qu'est-ce qu'une nation?* Paris: Euvres Complètes.
- 和田光弘 2005. 記念碑の創るアメリカ——最初の植民地・独立革命・南部. 若尾祐司, 羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史——史誌・記念碑・郷土』114-164. 名古屋大学出版会.
- Barič, N. et al. 2015. *Domovinski Rat-čitanka priručnik za učitelje povijesti u osnovnim školama i nastavnike povijesti u srednjim školama*. Zagreb: Školska knjiga, d.d. (クロアチア語)
- Croatian Homeland War Memorial and Documentation Centre 2011. *The town was the target: The hospital, the nursing home....* Zagreb: Croatian Homeland War Memorial and Documentation Centre.
- Marič, R. 2005. *Vukovar*. Zagreb: Turistička naklada d.o.o.
- Minority Rights International 2003. *Minorities in Croatia*. London: Minority Rights International.
- Nazor, A. 2011. *Velikosrpska Agresija na Hrvatsku 1990-ih/ Greater-Serbian Aggression against Croatia in the 1990s (The Republic of Croatia and the Homeland War: Overview of Political and Military Developments 1990, 1991-1995/1998)*. Zagreb: Croatian Homeland War Memorial and Documentation Centre (英語・クロアチア語).
- ヴコヴァル市. <http://www.vukovar.hr/> (最終閲覧日: 2019年2月17日)
- ヴコヴァルメモリアルセンター. <http://www.mcdrvu.hr/index.php/en/> (最終閲覧日: 2019年2月25日)
- 外務省, クロアチア共和国基礎データ. <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/croatia/data.html> (最終閲覧日: 2019年2月25日)
- クロアチア統計局. http://www.dzs.hr/default_e.htm (最終閲覧日: 2019年2月25日)
- Eurostat Statistics Explained, Unemployment statistics (released Dec. 2018). https://ec.europa.eu/eurostat/statistics-explained/index.php/Unemployment_statistics#Recent_developments_in_unemployment_at_a_European_and_Member_State_level (last accessed 25 Feb. 2019)
- Place of Memory Vukovar Hospital. <http://www.ob-vukovar.hr/mjesto-sjecanja/mjesto-sjecanja.htm> (last accessed 25 Feb. 2019)
- 〈著者略歴〉
- 木戸 泉 (きど いずみ)
- 1990年千葉県生まれ. 東京学芸大学大学院総合教育開発専攻地域研究教育サブコース修了. 現在建設コンサルタント勤務. 学術修士.